

第一章 石井長官と機動隊について……

この世界にある『日本国』は、妖魔たちが密かに、跋扈【ばっこ】している……

人を襲い、犯し、喰う妖魔たちの脅威【きょうい】から、秘かに国民を守る組織があった……その名は、『法務省特殊機動隊』。

全国各地より、極秘で集められた孤児たちを、日本国某所に存在する秘密施設にて、対妖魔兵士としての、特殊な訓練を施す。むろん、子供たちに『人権』や『戸籍』などは、ない。

6歳から17歳まで、妖魔と戦うよう教育(あるいは洗脳)された彼らは、特殊機動隊の創立記念日にあたる4月20日に、晴れて一人前の隊員として認められる。

その良き日は、幼年部の最年少組から、隊員・幹部・次官・長官に至る、組織全体の誕生日として、明治時代より定められている。

18歳の正隊員になれた彼ら・彼女らは、日本各地の機動隊基地に配属されて、死ぬ日まで戦い続ける……ごくまれに、55歳まで生存できた隊員は、自動的に『定年退職』を迎えるシステムもあることはあるが、それは、隕石が当たるより低い確率であった。

この地獄の組織を統率するのが、第97代目長官・石井 久【いしいひさし】……まだ、33歳の若さである。

身長・180 推定体重・80キロ前後 生真面目ながらも冷静沉着。18歳の初陣から、33歳の現在に至るまで、倒した妖魔は数知れず。別名『妖魔絶対56すまん』

その逞しい身体には、醜い刀傷の他に、妖魔獣との戦いで負った傷痕が、禍々しく残されている。

「傷は、戦士の勲章だ……」

威風堂々としている彼には、組織内外に、数多くの隠れファンが居る。

ワイロとエコひいきを嫌い、何事にも公平で、怒るとメチャ恐い。だが、時々見せる『笑顔の不意打ち』で、数多くの部下たちの心を驚掴【わしづか】みしている……罪な男だ。

月月火水木金金の勢いで、日本各地を、特殊なヘリコプターで駆け回る。どうひいき目に見ても、労働環境が過労死ラインを軽々と越えている。が、喜々として任務に当たる様は、輝かしい軍神のよう……そこのあなたも、長官のファンになるかも??

「日本国に食い込む妖魔はすべて、我ら機動隊で抹殺する!! 降伏は認めない、捕虜もとらない、殲滅【せんめつ】せよ!! 殲滅あるのみ!!」

ついたあだ名は、『鬼長官』。昨日も今日も、メチャクチャ恐ろしい。

……そんな彼でも、恋をしている。命を懸けた、真剣な恋を……

現長官付き慰安婦であり、愛しい恋人でもあるその人の名は……山田由真と言う。

身長160cm 体重50kg前後 背中に届く黒髪を、一つにまとめて三つ編みしている。ナチュラルメイクの童顔隊員。見た目は昭和の女子高校生。だが、実年齢は25歳。

スーパーマンを地で行く長官とは真逆に、非力で、病弱で、怖がり……なくせに、意外なとき、意外なところで、意外な相手に意見を言う。その姿は、貧弱ながらも勇敢だ。

ひがむ先輩各位からつけられたあだ名は、『チワワ』。しかし、いくら陰口叩かれても、睨まれても、健気な由真は、決して怯まなかった。

第二章 真夏の休みに『怪談百物語』

その瞳……正式名称は、万霊眼【ばんりょうがん】……凡人を無理やり霊能力者に激変させる、や

や強引なアイテムである。原材料は、特殊なガラス。

正隊員昇格試験に合格した者は、誰もが、装着を義務付けられる。視力はものすごく良くなり、人間に化けた妖魔や、壁際の幽霊などを、瞬時に見分けることができる。

老眼の心配もなく、暗闇でも本が読めて、気合いを入れれば、異性の浴場ものぞき放題と、色々と素晴らしい(?)使い方ができる。だから悪用絶対禁止である。

そんな使い勝手の良い万霊眼で、ホラー映画や、TVの怪談バラエティー等の画面に映り込む『本物のオーブや亡霊』などを見つけては、指さしてゲラゲラ笑う、不謹慎な奴も居る。

そう...彼のように...

「由真ちゃん...今からこのDVDを見ないか？」

ニコニコ笑顔で、普段着の長官が言った。丸首のTシャツに、色あせたジーンズが、長身の彼には良く似合う。

「えっ?...」

引きつった顔で由真は答えた。

ピンクのジャージ上下を着た由真は、珍しく長い髪を下ろしていた。

「でいぶいでい...ですか？」

ちらりと見えたそのタイトルは、『恐怖!! 心霊事故現場・ベスト100!!』であった。

「なーに、タイトルこそ100だけど、実際は99カ所しか扱っていない...って、壁に張り付いてどうするつもりだ？」

いつものサングラスを外して、上等隊員専用の黄金の万霊眼で、ウインクした。

怪談百物語...オカルトマニアなら、知っている。日本の伝統的な怪談スタイルのひとつであり、恐ろしい物語を100話語り終えると、本物の物の怪が現れるとされる。人が輪になって集まり、誰かが一話語り終えるごとに、ロウソクを一本吹き消す...やがて、100本目のロウソクを吹き終えたとき、あやかしが出現するとかしないとか？

...ともあれ、やっちはいけない危険なお遊びの一つである。

「ひゃあああああ...わ...私...怖いのは苦手ですう...」

幼児体形貧乳貧弱超怖がりの慰安婦・由真は、その大きな目を潤ませて、プルプル震えていた。その様子は、まるでチワワかハムスター...

(プブツ...メチャ可愛い...)

プライベートの隠れサディスト・石井長官は、吹き出したくなるのをこらえている。

「安心したまえ...この手の怪談話は、作りものだから。」

「でもお...」

「本物に近い小細工がされているが、万霊眼でなくても、偽物だと分かる。」

「そうでしょうか...」

...と、言うのも...由真ちゃん慰安婦は、過去に見たTV番組の中で、うっかり映り込んだ『本物の亡霊』を見つけてしまい、キャーキャー騒いだ黒歴史がある。

機動隊隊員あるあるだが、ニュースやワイドショーなどを見ていると、殺人事件や交通事故などの現場中継で、恨めしそうにうろつく亡霊などを見つけてしまう。これも、一種の職業病？

「え〜ん、え〜ん、ご辞退申し上げますう〜...」

新宿歌舞伎町の某マンションには、彼と彼女の二人きり。そそくさと、リビングから寝室へ逃げようとしてみたものの...

「だーいじょうぶ、私が居るから。たった120分のバラエティーだし...」

愛しい男の長い腕に、160cmの身体は、たやすく捕らえられた。

「やです!! 怖いです!! 助けてです!!」

「こらこら...私を誰だと思っている? 恐れ多くも、1000体以上の妖魔獣を退治した、激烈バトルジャンキー・石井 久さまであるぞ。」

「いや〜〜〜、この前も、怖くないって言って見せたDVD、メチャクチャ怖かったじゃないですか〜〜〜!! サダコもカヤコも、嫌いですう!!」

「男はね、いつまでも可愛い子にキャーキャー抱き付かれないのさ★」

素晴らしい本音を、サラリ。

「え〜〜〜ん、長官なんか、ジャー●に転職しちゃいなさいですう！！そこで毎日キヤーキヤー言われてください！！」

「…33歳じゃ、ジャー●のジュニアには、なれません。」

言うなり、リビングの純白ソファーに座らされた。
(ああ…このソファーの上で、何回イカされたことか…)

目を閉じて、プルプル震える軟弱由真ちゃんと、鼻歌交じりにDVDをセットする鬼畜長官・石井久。

かたや、特殊機動隊屈指のデキソコナイ隊員。こなた、異例の若さでのぼりつめたバトルジャンキーのスーパーマン…それでも、二人は相思相愛のおバカップルである。

「はい、部屋の灯りを暗くして…音量もアップして…」

「や〜〜〜だ〜〜〜、この手のDVDは、本物も映っているから、やです〜〜〜！！」

「…我々の本業は、『妖魔退治』だよ。この程度で怖がってどうするの？」

鬼長官、超珍しく、苦笑い…

「ごめんなさい、私は正隊員昇格試験に落ちた、おバカさんですう〜〜〜！！偉大なる加藤教官(♂)から、『お前は妖魔のおやつか、男のおもちゃになる』って、言われるほどの、デキソコナイですう〜〜〜！！」

「だから、慰安婦になれたのだろう？私個人専用の♥」

「愛玩犬より懦弱【だじゃく】で、ごめんなさい！！」

「可愛いから…許す…」

…いや、そう言う問題じゃ…(作者、意味なきツッコミ…)

「まあ、夜は長いから…」

と、ベッドにお持ち帰りする感覚で、怖がり慰安婦の腕を捕まえる、鬼長官であった。

…ついに、恐怖の上映会(?)が始まった。

灯りを薄暗くしてから、エアコンで部屋中をキンキンに冷やした。ついで、半泣きの由真に柔らかいパステルピンクのブランケットをかぶせる。

「私が居るから、怖くないよ？」

イケメンお兄さんも顔負けの、素敵な笑顔でウインクした。

「…いきなり、何処かへ消えたりしないでくださいね？」

往生際の悪い由真は、恋人兼鬼長官のナイス・ボディーに抱き付いた。

…一話につき5分前後の、セミドキュメントホラーが、これでもかっ！！これでもかっ！！えいえいえいつ！！…と、続く。

その多くは、昔聞いたような都市伝説を、まるごと焼き直したような、陳腐【ちんぷ】なお話ばかりである。が、時々出てくるモノホンの心霊画像が、由真ちゃんには強烈に怖い。

「いや〜〜〜！！血まみれのおねーさんが、背後の窓ガラスに張り付いているですう！！」

ガクブル震えながら、長官に抱き付き泣き出す臆病者。これでも25歳である。

「万霊眼だからこそ気が付く、コアな心霊画像だよな？」

グラスにウイスキーと氷を入れて、長官は、『男の余裕』を見せつけた。

「まあ…現場では妖魔に食われて成仏できない、可哀想な浮遊霊がわんさかと…」

「ぴえん…私、石井さまが居ないと、一週間以内でショック死しそうですう！！」

「あっ、この路地裏の奴、本物っほい！！」

「ひえ〜〜〜！！」

病めるときも、いちゃつくときも、いつも二人は仲睦まじかった。

それは、99話目が終わった直後に起きた。

パツ！！…唐突に、DVDの画面と、部屋の薄灯りが消えた。突然すぎる停電(?)のドサクサに、世界で一番愛している長官の気配も、消えた。

「ひよえええええええええええええええええ！！長官？長官？何処ですか！？」

恐怖とパニックでジタバタ暴れる怖がり慰安婦山田由真。その実力は、GOKIBURIさえも倒せないほど…懦弱にもほどがありそう…

「ふえええええええええん！！暗いの狭いの怖いですう！！！」
まるで5歳の幼稚園児のように、ギャン泣きする25歳の慰安婦さん。改めてブランケットをかぶり、ガクガクぶるぶる震えまくった。

それから数分後…暗闇だった部屋が、突然、明るさを取り戻した。
「あー、助かった！！灯りがついたのですう！！」
喜び勇んでブランケットを脱ぐと…そこには、真っ白い顔をした般若(?)が、由真の顔を覗き込んでいた。
「キヤーキヤーキヤー！！鬼い！！悪魔あ！！幽霊iiiiiiii！！」
瞬間…懦弱な慰安婦は、気を失った。

「由真、由真、大丈夫か？」
……前後に揺さぶられて目を開けると、そこには、イケメンイケボの長官が、心配そうな顔で自分を見ていた。
「ハッ！！わ…私…」
「大丈夫か？もう怖くないからな…」
バツの悪そうな顔で、長官が詫びた。
「すまない…わざと灯りを消して…その…驚かそうと…」
…早い話、リモコンで灯りとDVDプレイヤーを消したのは、石井長官であった。
「まさか気絶するとは思わなかった…すまない、もう二度としないから…」
と、言いつつ般若のお面を投げ捨てた。
「ふえ…ふええええええん！！怖かったですう！！」
ポカポカポカ…由真ちゃん慰安婦は、まったく痛くない連続パンチをお見舞いした。
「よしよしよし、怖かったな、ごめんな、悪かったよ…」
とか何とか言って、鬼長官が頭を撫でる。
「…罰として…新作のコンビニスイーツ…買ってきてください…」
「はいはいはい…ルイヴィットでもシャネでも、何でも買ってあげるからね…」
「高級ブランド、私には似合いません…」
「…じゃあ、ユニク●は？しまむ●は？」
「何もいらぬから、ずっと私のお側に居てくださいーい！！」
泣きべそかきながら、またまた長官に、むぎゅむぎゅと抱き付いた。
「はいはいはい…」
とか何とか言って、しっかり背中を抱きしめて、貧弱すぎる慰安婦を慰める、鬼長官なのでした。

第三章…と言うより、オマケ…

今日も、長官は怒鳴っている。モニター越しに、怒鳴っている。
「この、愚か者ー！！」
妖魔退治の大事な現場にて。敵の妖魔と対峙して、ビビりにビビる若手隊員たちを、巨大モニター越しでビシバシ指導する。この声が、また、ド迫力で…
「まず、G-3号こと小西、斬り込み隊長であるお前が、真っ先に敵の罠にかかるな！！次にG-28号渡辺、何故、同期小西のサポートに回らない！？最後にF-6号の田中、最年長のお前が、何故真っ先に逃げた！？お前たちのチームワーク、ガツガタじゃないか！！そろいもそろって愚か者ー！！」
本当は、自分も戦闘の最前線に行きたいところだが、長官は司令官でもあるので、安全な司令室から隊員たちに命令することしか、許されない。だからこそ、余計に動きの鈍い(?)現役隊員たちの動作に、イライラするのだ。
「今度このような無様な真似をしてみろ、三人まとめて給料をカットしてやるからな！！」
必要以上にエキサイトする石井長官、33歳。隊員番号は、E-7号。
…彼もまた、恋する男のひとりであった…

第三話・・・意味なく終わる・・・